課題番号５

月形町ミニトマト安定生産

～　ミニトマト生産性向上　～

対象：キャロル10作付者（２１戸）

１　活動の背景

・月形町ではミニトマト栽培をＨ22年から11戸で開始。
・新規参入の受け皿としても活用され、作付面積は４ha程度を維持。
・ＪＡ月形町では、Ｒ３年から新たな選別施設を稼働。
・１株収量は2.72kg（H29～R2年平均）と伸び悩んでいる。

・収量の向上、品質の安定による出荷量の確保、所得の確保が重要課題

〇定期的な個別巡回
〇営農情報の発行など

・１株収量３kg以上確保できる農家戸数を増やす！

R2年	R3年	R4年	R5年	R6年	R7年目標
5戸	6戸	9戸	3戸	6戸	10戸

２　活動の経過

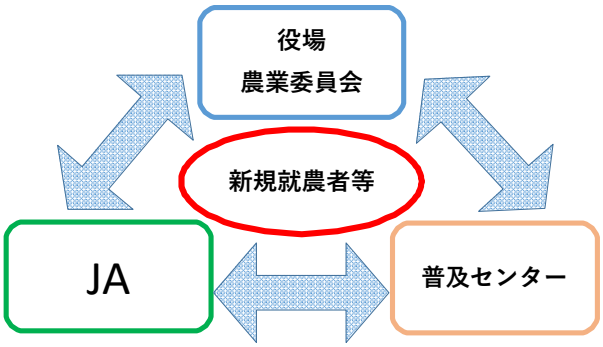
(1)巡回指導（表１）
・４～５月はＪＡ担当者とともに育苗ハウスの管理状況、定植後ハウスの初期生育を確認。基本技術に基づく栽培管理、適期作業の実践に向け啓発・支援。
・６月以降は普及センター主体で巡回。生育や着果状況に応じた草勢管理、特に高温時の遮光、換気、かん水状況の確認と栽培管理等について意見交換、助言。
・土壌病害等の障害発生ほ場の現況確認。今後の対応策を提案、農業者と意見交換。

表１　巡回指導の内容

時期	戸数	主な内容
４月	6	育苗状況確認・助言
５月	9	育苗、定植、生育状況確認・助言
６月	11	生育状況確認・助言。花数調節の実施啓発
７月	12	生育、収穫状況確認・助言 病害虫（土壌病害含む）の発生状況確認
８月	8	生育、収穫状況確認・助言 病害虫（土壌病害含む）の発生状況確認
９月	9	生育、収穫状況確認・助言 土壌病害の確認、対応策相談
10月	13	果実の成熟、収穫状況確認・助言 栽培結果確認、今後に向けて意見交換
11月	3	土壌病害への対応策検討・助言

図2　7/22新規参入巡回

〇新規就農実習者の選定・募集・受入等
〇経営安定化に向けた指導、実習農場の利用促進



〇指導農家の紹介、作付品目等の助言指導
〇新規就農候補地等の情報提供等

〇試験場・農大等の研修案内に関する情報提供
〇栽培技術指導

図１　新規参入サポートチームの役割

(2)新規参入者への栽培支援
・対象４戸（概ね就農８年以内）に対し、新規参入サポートチーム（図１）による個別巡回を４回(4/23，7/22，10/23，2/24)実施し、栽培・経営について状況確認、意見交換、助言（図２）。
・随時、個別の要請に対応し、就農準備、管理方法等に対して助言。

(3) 営農情報の発行、各種行事への対応
・時期別に重要な栽培管理の要点を８回発信（表２）。
・現地研修会（6/23、図３）では町内ハウスにて、着果量の調節と草勢維持について啓発、注意を要する病害虫等について情報共有。
・反省会（11/18）ではＲ７年を振り返り、Ｒ８年に向けた栽培管理について啓発。

表２　営農情報の発行

回	発行日	主な内容
①	3/19	育苗管理
②	4/28	育苗後半の管理、定植作業、定植後の管理
③	6/06	草勢の判断、かん水、追肥、花数調節、整枝作業
④	6/23	温度管理、着果量・時期の調節、葉面散布ほか
⑤	6/23	病害虫防除
⑥	7/18	かん水、生理障害対策、病害虫防除
⑦	8/21	摘心、秋期に向けた管理（裂果対策ほか）
⑧	9/24	熟期促進、病害虫防除

(4) 本年の生育経過
・６月前半までの生育は緩慢。６月後半以降は高温が継続し生育は進んだ。出荷は前進し８月上旬までの出荷量が増加。
・遮光・遮熱資材活用、換気など対策はしていたが、着果負担による草勢低下、高温等により落花が多く、６～11段目(7月上旬～8月上旬開花)の果数は減少 。
・収量は平年並の農業者が多かったが、Ｍサイズ以上の果実割合が平年より高かった。

図３　現地研修会（6/23）

３　成果の具体的内容

・１株収量３kg以上達成農家は７戸となり（図４）、うち３戸は新規参入者であった。
・農業者の工夫、努力により、全戸平均の１株収量はＲ５年の2.59kgから本年は2.93kgと増加（2.5kg以上確保戸数はＲ３年以降で最多で12戸）。５月中旬までの定植作型（作付け面積の70%）で収量は高い傾向であった。
・６～８月の高温により果実の成熟は前進したが、高温対策の実践効果もあり、生理障害（グリーンバック果、軟化玉、つやなし果など）の発生は軽微で品質は良好。

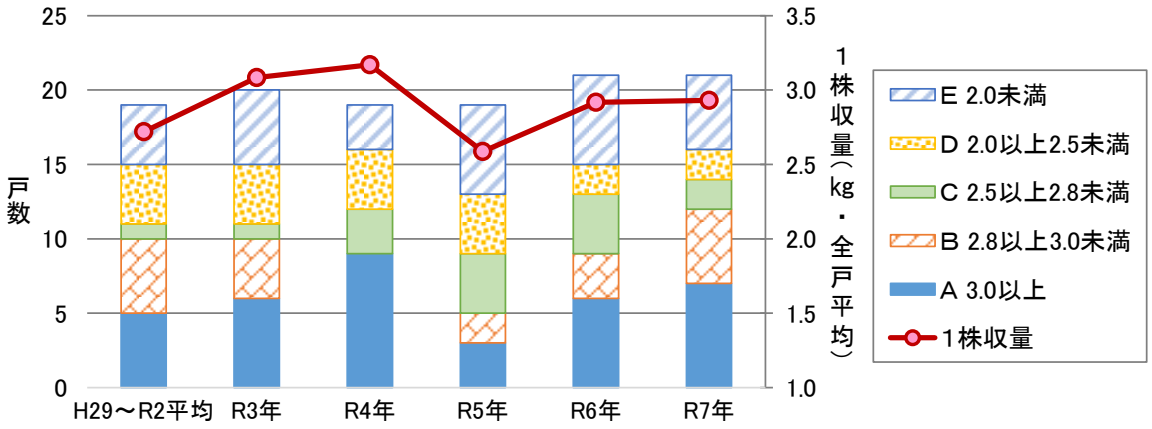


図４　１株収量別の戸数推移

４　今後の課題と対応

・基本技術に基づく栽培管理、適期作業の実践を啓発していく。特に生育前半の着果過多により、後半までの草勢維持が困難になるほ場が多いため、主枝切替、摘房処理、花数制限のうち、いずれかの実践を改めて啓発していく。
・次年度以降は通常業務として、収量向上、品質安定を目指した活動を継続する。併せて、土壌病害発生農業者に対する支援、後継品種の選定に対する支援を行う。
・新規参入者に対しては、引き続きサポートチームと連携し、濃密に支援していく（地域課題として活動）。